

施策	29	ふるさと意識の醸成	政策	2	地育力によるこころ豊かな人づくり
施策主管課	生涯学習・スポーツ課	課長名	馬場保之	内線	3740
施策関係課名	歴史研究所、公民館、美術博物館、中央図書館、学校教育課				
政策担当部長名	社会教育担当参事 松下 徹				
重点施策	○	関連計画	飯田市教育振興基本計画、地育力向上連携システム推進計画、飯田市立図書館サービス計画 飯田市歴史研究所第3期中期計画		

1 施策の目的

目的	対象	市民
	意図	①地域を知る ②地域を誇りに思う

2 現状把握

(1) 対象指標、成果指標の状況

対象指標	単位	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度			
① 住民人口	人	105,335	104,728	103,947	103,105	102,446	101,743	100,957			
※成果指標の設定の考え方は別ワークシートにて整理											
成果指標	単位	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	実績値 28年度	目標値 28年度	指標の 傾向	
① 飯田の自然・歴史・文化を学んでいる市民の数(延人数)	人	41,358	48,465	59,169	46,032	48,112	46,277	41,690	52,000	△	
② ふるさと(飯田)を誇りに思っている市民(成人)の割合	%	75.9	77.2	75.5	72.8	76.4	74.3	73.4	80.0	○	
③ ふるさとに愛着を感じている高校生の割合	%	-	-	76.8	-	-	75.6	-	78.0	○	
④ この地域に住み続けたいと考えている高校生の割合	%	-	-	48.7	-	-	48.1	-	50.0	○	

(2) 成果向上に向けての役割分担

主体	役割分担	ムトス指標と把握方法と単位	24年度	25年度	26年度	27年度	実績値 28年度	目標値 28年度	指標の 傾向
行政	市(国・県) ①学習機会を提供する。 ②学習活動を支援する。 (学習活動には調査研究活動も含む) ③情報発信を行う。	①学習機会の数(社会教育機関における地域資産を活用した学級・講座の開催実績を集計、件)	① 1,636	1,855	2,076	1,985	1,781	1,900	○
		②学習活動の支援数(市民等の学習活動への共催・後援数及び講師派遣等の支援数を集計、件)	② 996	1075	1,023	1,148	993	1,050	△
主体	役割分担	ムトス指標と把握方法と単位	役割発揮の特記事項(後期5箇年)						
市民等	①地域資源を調査研究する学習活動を行う。 ②地域を学習する。 ③情報発信を行う。	①②地域学を担う団体数 ③情報発信数	・伊那谷研究団体協議会(伊那谷学の研究実践を多様な分野で担う16団体が加盟)から、「伊那谷学」のとらえ方と、今後に向けた推進のあり方をまとめた方針が打ち出され、ふるさと意識の醸成のために、社会教育機関の事業や学校教育への積極的な連携の考え方が示された。						

役割の発揮状況

後期(5箇年)	行政として多様な主体に対する協働の働きかけの取組と成果	<ul style="list-style-type: none"> ふるさと意識の醸成においては、学校教育、社会教育を通じたふるさと学習の推進が重要であるが、学習テーマとなる地域資源の発掘・研究・情報発信や、学習機会の提供については、調査研究や学習支援を行っている多様な主体の力によるところが大きい。その中核的な組織で構成する伊那谷研究団体協議会との懇談を重ね、伊那谷研究団体協議会では平成24年度に伊那谷学についての方針を、飯田市教育委員会では平成25年度に伊那谷の自然と文化をテーマとした取組み方針をまとめた。特に双方が共通課題としてとらえた伊那谷学を担う人材の発掘・育成に向けて若年世代を対象とした伊那谷の自然と文化をテーマとした学び合い講座を25年度より共催で企画実施してきている。 各社会教育関係機関においては、多様な市民研究団体と協働した事業を数多く行ってきており、こうした事業の企画実施方法は、まさに飯田方式とも言えるものである。
	多様な主体の協働を推進していくための課題	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育のふるさと学習の推進における多様な主体との協働には、学校職員と地域人材を結びつけるコーディネーターの存在が重要であり、行政においては公民館主事や学芸員をはじめとする教育委員会事務局職員のコーディネーターとしての力量の形成・維持が課題となる。 地育力の主要な担い手となり、ふるさと学習を市民レベルで推進している市民研究団体においては、会員の高齢化や新規会員の確保の困難性から会員減少が進んでおり、今後の活動の担い手となる人材の発掘、育成が大きな課題となっている。

3 施策を取り巻く状況変化・有識者等の意見

この施策に対して有識者等(議会、市民、関係者・団体等を含む。)からどんな意見や要望が寄せられているか。	・自然・歴史的価値を見出し、シティープロモーションとして、メディア媒体を有効活用した情報発信に取り組むとともに、改めてふるさと意識の喚起につなげる取組みをされたい(市議会) ・飯田市美術博物館の常設展示が開館以来30年近く変わっていない。近年は、新しい発見や作品を広く紹介するだけでなく、既存の資料や作品、物事を多層的・多面的に理解できるような展示紹介方式が広がっていることを踏まえ、これまでの調査研究の成果や蓄積を展示紹介できるような常設展示を行うことによって、市民のニーズに応えつつふるさと意識の醸成を図ってほしい。(美博協議会) ・若い学校教諭の郷土への関心が薄くなってきているとすれば、行政職員が第一線を退いたらそういった活動に関わって行くことを提案する。(基本構想推進委員会) ・市民組織と行政が協働して、多様な地域資源・資産を活用したふるさと学習を、各地区や集落の単位で、また地区間で連携しながらさらに進めていくことが必要である。(社会教育委員会議)
施策を取り巻く状況(対象者や根拠法令等)はどのように変化しているか、更に今後どう変化するか。	・人口減少時代の地域振興においては、飯田で育った子どもたちが、学びや経験・経歴を積むために一旦は地域外に出ても、やがては飯田に戻り、子育てを行い、地域産業や地域づくりの担い手となって活躍していくといった人材サイクルの構築がますます重要になってくる。 ・東日本大震災を契機に、「暮らしにおける人々の絆の大切さ」が意識されるようになってきており、そのような絆を形成し実感できる範囲としての「ふるさと」という思いが強まっている。 ・社会全体のグローバル化やIT化の進展、当地域が直面している高速交通網時代の到来の中で、なりゆきに任せればふるさと意識の希薄化が進むことが懸念される。 ・ふるさと学習のテーマとなる地域資源の発見・資産化、保存継承を支え、ふるさと学習の機会提供や学習支援にも大きな役割を發揮している地域内の研究者・活動者の層が、高齢化と新たな人材が生まれにくい状況下で年々薄くなってきている。

4 評価結果(後期5箇年)

(1) 実施した事務事業の評価(取組みの状況評価)

<input type="checkbox"/> 計画どおり取り組めた
<input checked="" type="checkbox"/> おおむね計画どおり
<input type="checkbox"/> あまり取り組めなかった
<input type="checkbox"/> 達成できなかった

(2) 施策全体の評価(外部要因も含めた総合的な評価)

<input type="checkbox"/> 進んだ
<input checked="" type="checkbox"/> ある程度進んだ
<input type="checkbox"/> あまり進まなかった
<input type="checkbox"/> 進まなかった

5 後期5箇年の取組評価(主に取り組んできた事項とその成果・成果が得られた要因)

【評価結果の理由】

○地域を知り、地域を誇りに思う市民の割合は高い水準を維持できている。
○前期の総括課題として整理した地域研究者の減少に対する取組みと、高校生を対象にした事業展開について、多様な主体との協働関係を構築し新たな取組みを開始した。

【事務事業群テーマ別の評価】

<ふるさと学習の場づくり支援>

○公民館、図書館、美術博物館、歴史研究所等の社会教育機関が中心となり、子どもから高齢者まで幅広い層が行うふるさと学習の場づくりへの支援を行っている。

○前期課題の高校生世代を対象にした取組みについては、公民館が中心となり、飯田OIDE長姫高校商業科における地域人教育への支援や、飯伊の高校生を対象に海外スタディーツアーも組み入れた高校生講座を実施し、高校生がふるさとの価値や独自性を知り、ふるさとに関連付け、あるいはそこで接した人たちの姿に魅かれて将来の生き方を考える貴重な学習機会ができてきている。

また、キャリア教育や国際化教育を推進する動きの中で、飯田下伊那地域の各高校におけるふるさと学習の充実も図られてきている。

○義務教育の充実の施策(施策22)で進めている小中学校におけるふるさと学習については、24年度よりふるさと学習推進事業を開始してさらなる推進を呼びかけ、25年度からは全市及び各校区におけるふるさと学習のテーマとなる資源や人材の情報を各学校に提供している。こうした取組みを通じて、各小中学校におけるふるさと学習が、校区の特徴も活かされながら充実してきている。

<地域資産に関する情報の発信>

○各社会教育関係機関において、展示、報告書等の発刊、幅広い層を対象にした学習事業の企画開催、多様な媒体への情報掲載等を通じて地域資産に関する情報の発信を行っている。

○特に美術博物館においては、毎年「研究紀要」「自然史論集」を発刊していること、平成24年度に「飯田・上飯田の民俗Ⅰ」を発刊したこと、プラネタリウムを活用して上映するドームシアター番組(16作品)の制作上映に新たに取組んだこと、歴史研究所においては設立時からの重点課題であった「飯田上飯田の歴史」(上下刊)を発刊したこと、生涯学習・スポーツ課においては多様な文化財情報を掲載するホームページ「文化財保護いいだ」を開設したこと等が特徴的な取組みであった。

○南アルプスエコパーク登録により、自然環境に影響されている生活文化を学び直したり、地域資源としてアピールしたりする動きが始まっている。

○図書館では、所蔵の古地図を展示して、ふるさと飯田の今昔を地図から広く市民に情報発信した。

<郷土ゆかりの偉人の顕彰>

○菱田春草、日夏耿之助、田中芳男、藤本四八をはじめとする郷土の偉人を顕彰するための講座、展示事業を美術博物館を中心に実施してきている。菱田春草と田中芳男については、プラネタリウム投影用のオリジナル番組を制作し紹介している。

○平成28年度に、飯田市美術博物館では、田中芳男没後百年記念特別展「南信州 郷土の偉人たちー日本の近代化に挑んだ人々ー」を開催し、40人余の出身者の業績を紹介し、各方面からの反響があった。

○なお、20年間にわたって行ってきた藤本四八写真文化賞は、写真文化の普及振興に寄与し、初期の目的がある程度達成できたことから、第10回をもって終了した。

○特に明治以降の日本画に大きな影響を与えた菱田春草については、生誕140周年にあたる26年度には、新たに発見された未完作品やスケッチを中心とした特別展等の各種展示やシンポジウム・ワークショップ・講座の開催、ドームシアター新番組の制作、記念公園の整備・開園等の事業を行い、春草の偉業を広く周知した。こうした取組の蓄積によって、平成29年度から飯田市美術博物館春草記念室常設展示化がスタートすることになった。

○図書館では、郷土の偉人をテーマに、その功績を紹介した特別資料展を開催、また、飯田に郷立大学創設を唱え、図書館に本を送り続けた、宮澤芳重について学ぶ事業を市民と協働で取り組んだ。

<地育力の向上>

○地育力向上連携システム推進計画の後期アクションプログラムについては、毎年度の評価と見直しを行い、教育委員会を中心とする部署が連携して、地育力の向上と、地育力を活用した取組みを推進した。また、毎年度教育委員会職員の地育力コーディネーターとしての自覚と力量形成につなげるための研修事業を実施している。

○前期課題であった伊那谷学をテーマとした研究ネットワークの構築については、伊那谷研究団体協議会との意見交換を密に行い、それぞれで取組み方針を作成し交換し合うとともに、双方で重点課題とした伊那谷学を担う人材の発掘・育成については、25年度から共催による連続講座を企画実施している。

<全体的に>

○ふるさと意識の醸成は、日頃の生活体験が基盤となるものであり、単に郷土の資産や偉人等の情報を伝えるだけでは効果が限られると言える。後期期間中に、高校生たちが様々な分野で活躍している地域在住の人に接したり、伝統行事や地域活動に参加するような取組を進めたところ、そうした実体験によって地域への関心やふるさと意識が高まるような様子が多くなってきた。

6 上記の取り巻く状況の変化等を踏まえ、かつ、リニア時代を見据えた上での課題・その課題に取り組む際の方向性(有効策)

<ふるさと学習の場づくり支援>

- 幅広い世代の多くの市民が飯田の独自性と価値を理解し、誇りを持って飯田に暮らし続けられるよう、地育力を活用したふるさと学習の機会を積極的に提供する。
- ふるさと学習の場については、社会教育関係機関毎の情報発信を充実させるとともに、市民が学習情報を総合的に知ることができる学習情報システムを整備する。
- 義務教育の充実の施策(施策22)で推進している小中学生のふるさと学習については、地育力となる地域資源と地域の人材を学校につなげるコーディネート機能をさらに高め、各校区の特徴を活かしたふるさと学習を推進する。
- 高校生世代を対象としたふるさと学習については、高校生講座や地域人教育を中心に、さらなる働きかけと学習支援を行うとともに、産業と教育との一層の連携を図っていく。

<地域資産に関する情報の発信>

- 美術博物館等の常設展示の更新を行うとともに、企画展示の充実、刊行物の発刊、学習事業の実施、多様な媒体への情報掲載等を通じた情報発信をさらに進める。

<郷土ゆかりの偉人の顕彰>

- 菱田春草については、美術博物館の春草記念室の常設展化(日本初の春草常設展示館の実現)を図るとともに、ゆかりの地を含めて、恒常的に顕彰し、学習事業等が行われるような環境整備を行う。
- 美術博物館で特別展を行うなど、郷土ゆかりの人物の偉業を知り、地域への誇りを高め、これからの時代における生き方と結び付けながら考え合う学習機会を継続的に提供する。

<地育力の向上>

- 地育力を支える地域人材の発掘と活動支援を行うとともに、多様な地域資源の存在と価値への認知度を高めるための情報発信を継続的に行う。
- 飯田市教育振興基本計画及び飯田市の総合計画の見直しに合わせて、地育力が飯田市独自のまちづくりを支える飯田市教育の根幹に据えるべきものであるため、計画の中に位置づけた。今後は計画に基づいた取組みを確実に推進する。
- 伊那谷研究団体協議会との情報意見交換を継続的に行いながら、伊那谷学を担う人材の発掘・育成を協働して進める。

<全体的に>

- 今を生きる中で、地域の人や環境、風土の中で今を生きているという実感を持てるような取組みを工夫する必要がある。そういう観点からすれば、ふるさと意識の醸成は、教育分野だけでなく、様々な分野で取組むことが求められる。